あん・まくどなるど

県立宮城大学特任助教授

## エコ・ツーリズム　eco-tourism

パソコンのキーを打ちまちがえたら、**エコ**ツーリズムのつもりだった文字が**エゴ**ツーリズムになってしまう――のっけに、わるいブラック・ユーモアで恐縮。

現状のツーリズムはエコ重視からほど遠い。人間の**エゴ**がツーリズムにおもくのしかかっている。こんなふうに偉そうにいうわたし自身、自分の北米・アフリカ・ヨーロッパ・アジアにかけての 40 カ国弱のいまでの農村漁村をめぐるフィールドワークの旅を謙虚にふりかえるときに、**エゴ**ツーリズム的なふるまいがなかったとは、まったく言い切れない。

旅・ツーリズム・観光――どんな呼び方でもいいが、そこにひそんでいる意識の共通点は旅人あるいは観光客が、とにかく楽しめればいい、いや、楽しまなければならない（楽しみ方の定義や議論はここでは無視）、というのが現状の«ツーリズム根性»だと思う。旅先の自然環境に自分の行為が、どのようなインパクトをあたえているか配慮している旅人が、これまで、どれだけいただろうか。

**エコ**ツーリズムの基本趣旨は、ずばり、旅先で人間の**エゴ**をどれだけ押さえられるかというところにあると思う。まったく、なくすことは不可能だろうが。人が旅にでかけるとき、自然界への負荷を考えるだけではなくて、その負荷を減らそうとする行為がエコツーリズムではないのか。ここから先は意見がわかれると思うが、**エコ**（重視）ツーリズムは自然環境・人間環境――総合的に環境を考えたうえで、あらたなツーリズム像をつくることを目指していると思う。たんに自然と触れあうチャンスを人びとに提供し、「あら自然っていいわね！」という線香花火のような感動を人びとにあたえるだけでは、物足りないように思う。

**エコ**（重視）ツーリズムには、総合的な環境意識をたかめるためのきびしいルールが必要だと思う。参加する人数の制限や条件、提供する側とその提供するエコツアー・パッケジの内容などを継続的にモニターする制度も最低条件として不可欠だとも思う。山歩きや海もぐりをはじめ、一見、楽しそうな自然体験であっても、参加人数、または現場での行為が自然にあたえるありとあらゆる負荷を計算したうえでなければ企画されるべきではない。

農山漁村のフィールドワーカとして、ひとこと、言わせてもらえば、たんな

る農業体験はダメだ。農業自体が、自然環境破壊の行為のひとつであることを頭におき、自然環境に配慮した農法（たとえば認証された有機農法）をとりいれている先での農業体験でなければ、**エコ**ツーリズムを名乗ること自体が、詐欺に近いように思う。漁業の小型定置網体験もそうだし。

最後の一言。海外の事例を検証してみるとエコツーリズムは、少数民族とふかくかかわっていることが目立つ。それが、彼らの雇用の場になっていることに注目したい。北海道のアイヌ族も、カナダのイヌイットもそうだが、エコツーリズムが、彼らのいい雇用の場になればと願っている。